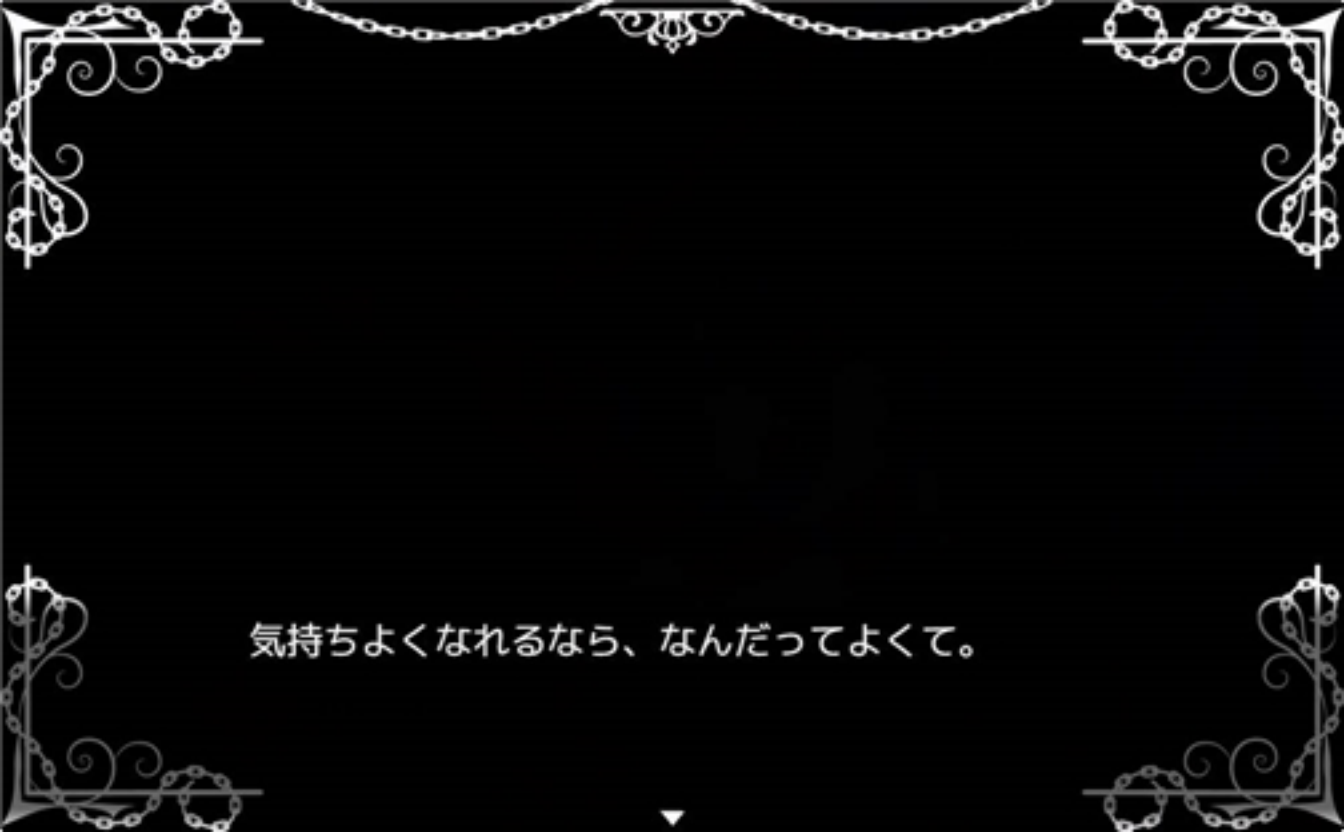
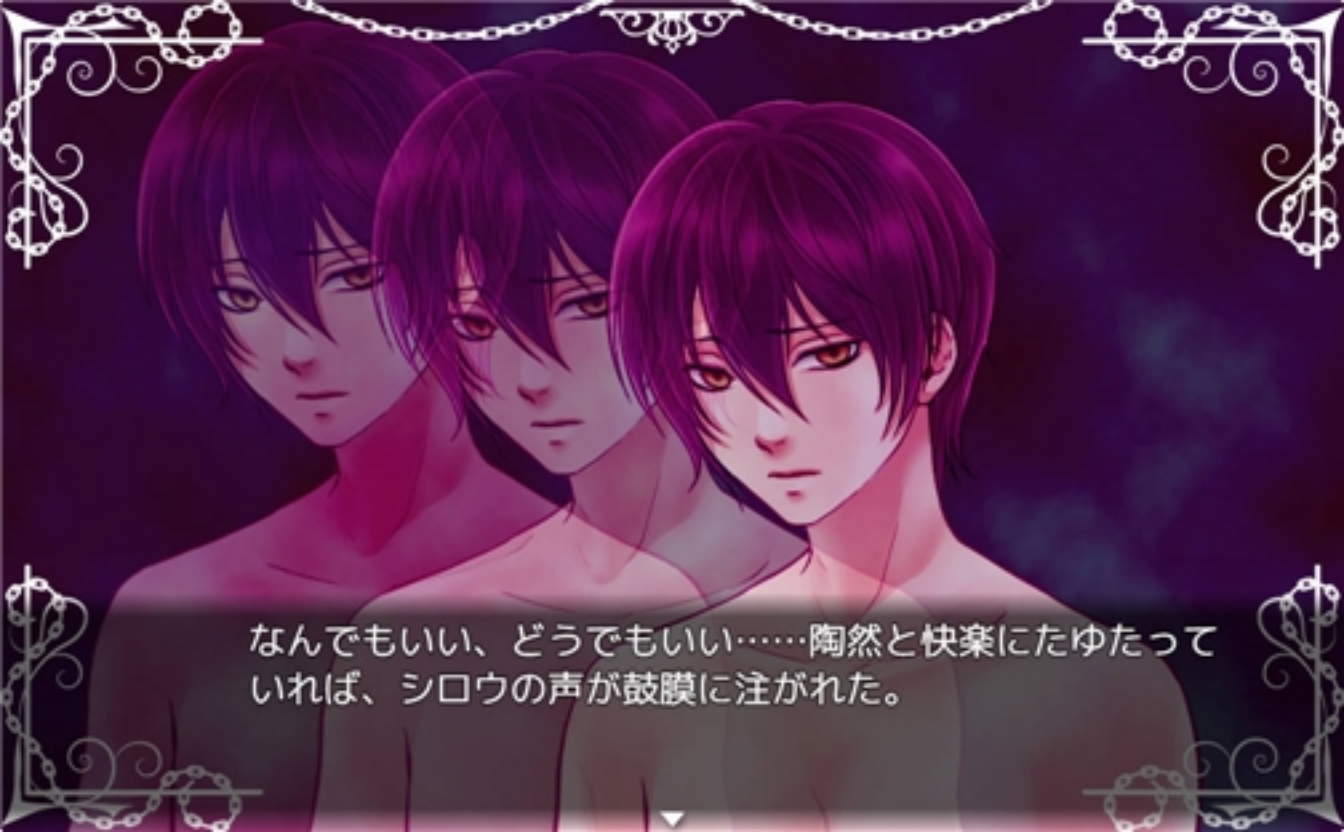


されて嫌なことなんて、あるわけもなく。



気持ちよくなれるなら、なんだってよくて。



なんでもいい、どうでもいい……陶然と快楽にたゆたって  
いれば、シロウの声が鼓膜に注がれた。



[三月シロウ]

「なんでもいい、どうでもいい……誰だっていい、か？」





[小鳥遊レイ]

「！」



はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクン

ピクンッ

ぽっと現実に引き戻される。

はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクン

ピクンッ

目隠しを取り払われれば、いつもと寸分違わぬ姦濫たる光景を目にして身体がずくと疼く。

はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクン

ピクンッ

思わず身動きすれば、首と四肢に付けられた拘束具から伸びる鎖が小さく鳴った。



はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクンッ

ピクン

[小鳥遊レイ]  
「ン……」



はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクンッ

ピクン

【三月シロウ】

「違うのか？」



はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクンッ

ピクン

【小鳥遊レイ】

「あ、も、わかん、ない……」



はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクンッ

ピクン

【三月シロウ】

「わからない、か。結構酷いことを聞いたんだがな」



はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクン

ピクンッ

ぐいと玩具のコードを引かれて、ナカに埋められている幾つものローターに内壁を緩く擦られる。

はあはあ

あああ

ほうほう

ピクンッ

ピクンッ

ピクン

イトコロに当たっていたそれが遠ざかったことに不満の  
喘ぎを零せば、俺の機微を見て取ったシロウがからかうよ  
うに告げた。

ピクンッ

ブウン  
ブウン

ピクンッ

【三月シロウ】

「もっとよくなりたいのになって顔してるな」

ブ

ウン



ピクンッ

ブウン  
ブウン

ピクンッ

ピクンッ

【小鳥遊レイ】 ブ  
「ン、だって、こんなのじゃ、たりない……」





ピクンッ

ブウン  
ブウン

ピクンッ

ピクンッ

腰をくねらせて、両胸に取り付けられたキャップを弄びながら甘ったるい吐息を零す。

ピクンッ

ブウン  
ブウン

ピクンッ

ピクンッ

俺を見て一笑したシロウが、伸びるコードをくいと引っ張った。

ウウン  
ウウン

ピクンッ

ブウン  
ブウン

ピクンッ

【三月シロウ】

「四つもローターが入ってるのに、こんなの扱いは凄いな」

ピクン

ブウン



ピクンッ

ブウン  
ブウン

ピクンッ

ピクンッ

**[小鳥遊レイ]** ブ  
「う、あ、らって、これ、シロウのじゃない……」



ピクンッ

ブウン  
ブウン

ピクンッ

ピクンッ

ウウン  
ウウン

思い描くのは、もっと熱くて大きなモノの存在。

ピクンッ

ブウン  
ブウン

ピクンッ

ピクンッ

ウン  
ウン

これも気持ちいい、けれど俺が欲しいモノじゃない。





[小鳥遊レイ]

「～～っ、ア、あ……や、ら、めえ、つあ、ああア！」







ズプッ

はあはあ

ズン  
ズン

ズプッ

ズン  
ズン

ぼんやりと視界に入る景色を見れば、姦濫たる嬌態が飛び込んできた。

ズプ

ズンッ

ズプッ

はあはあ

ズン  
ズン

ズプッ

ズン  
ズン

腰を高く持ち上げられ、脚を屈曲させられたまま秘所を貫かれる体位の名前。

ズプ

ズンッ

ズプッ

はあはあ

ズン  
ズン

ズプッ

ズン  
ズン

屹立に被せられ、先端に容赦のない快楽を与え続ける玩具の名前。

ズプ

ズン  
ズン

ズプッ

はあはあ

ズン  
ズン

ズプッ

ズン  
ズン

わからない、全然わからない。

ピクンッ

ズプ

ズプッ

はあはあ

ズン  
ズン

ズプッ

ズン  
ズン

けれどカズヤがスることなら、俺はなんでも良かった。

ズンッ

ズプ

はうろうろ

ズ  
ブ  
ッ

あ  
あ  
あ

ズ  
ズ  
ン  
ン  
あ!

[小鳥遊レイ]

「ん、ひア……こ、れ、キツイ……も、むり……ア、あ！」



はうらうら

ズ  
ブ  
ッ

あ  
あ  
あ

ズ  
ズ  
ン  
ン

[双葉カズヤ]  
「まだイケるでしょう？」





はうほう

ズ  
ブ  
ッ

あ  
あ  
あ

い  
い  
い

ガンガンと腰を揺すぶられ、上壁を大振りに擦られるたび、痺れるような快感が身体を支配する。

はうはう

ズブツ

あああ

いいい

もう無理だ、だめだと頭が警鐘を鳴らすのに、身体はいくらでも欲して勝手に腰が動いた。

どうだ？

ズン  
ズン

あああ

ピクンッ

ピクンッ

ズン  
ズン

ドブツ

ズプツ

[小鳥遊レイ]

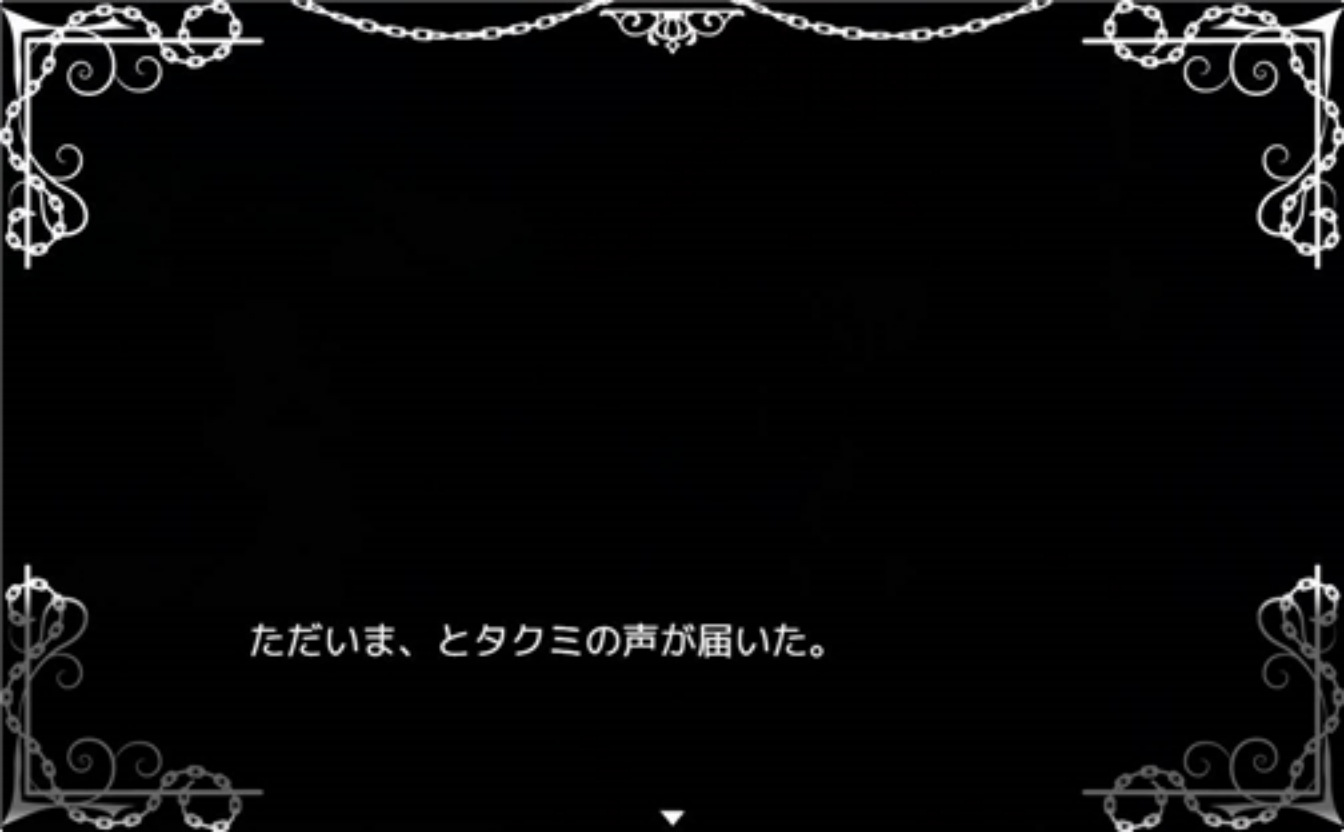
「ひああ、ア、あ、や、ああ、あ、う」

ズン  
ズン




もつと





ただいま、とタクミの声が届いた。



感じてる？

はうらうら

【小鳥遊レイ】

「っ、ふ……」

ドプツ

ズン  
ズン



感じてる？

はうろうろ

【七瀬タクミ】

「レイ、いい子にしてた？」

ドブツ



感じてる？

はうらうら

[小鳥遊レイ]  
「~~っ、う……！」

ズン  
ズン

ドプツ





感じてる？

はうろうろ

【七瀬タクミ】

「あ。いまイッちゃった？ ヒクヒクしてる」



感じてる？

はうろうろ

【七瀬タクミ】

「オレもしかして、熱烈歓迎されてる？」

ド  
ッ



感じてる？

はうらうら

【小鳥遊レイ】

「っ……ん……」

ズン  
ズン

ドプツ



感じてる？

はうらうら

【七瀬タクミ】

「ん……いーこ、可愛いよ」

ドプッ



ズブツ

はうろうう

はあはあ

あああ

ゆるりと髪が混ぜられる感触に、俺は見えない目を細めた。

ドブツ

ズブツ

はうろうう

はあはあ

あああ

両目を覆われ、口を塞がれ、手足を拘束されてからどのぐ  
らい経ったのだろう。

ドブツ

ズブツ

はうろうう

はあはあ

あああ

タクミが不在の間はずっと、以前よりも太い玩具を埋め込まれっぱなしだった。

トプツ

ズブツ

はうろうう

はあはあ

あああ

このままでも十分に追い詰められているのに、タクミの手が玩具を掴み、ゆるゆると抜き差しされる。

ドブツ



ズブツ

はうろうう

はあはあ

あああ

強い快楽を感じるたびに身体が跳ねれば、じゃらじゃらと首輪の鎖が音を立てて鳴った。

ドブツ

らっ  
っ

はあ  
はあ  
はあ

はう  
ろう  
う

ああ  
ああ  
ああ

ド  
プ  
ッ

[小鳥遊レイ]

「ん、う、~~っ、ン！」

ズ  
ブ  
ッ



ズブツ

はうろうう

はあはあ

あああ

[七瀬タクミ]

「物足りなかったでしょ？ 今日もいっぱいヨクしてあげる」

ドブツ



ズブツ

はうろうう

はあはあ

あああ

[小鳥遊レイ]

(ちがう、ちがう、も、イキすぎて、らめ、っア！)

ドブツ



どうだ？

ズブツ

ズン  
ズン

ピクンツ

もつと

ぬちゅ

はらうらうらう

あああ

ぬちゅ

ドプツ

いいい

は  
はあ

[小鳥遊レイ]

「っ、~~~~！」

ぬちゅ

ピクンツ



どうだ？

ズブツ

ズン

ズン

ピクンッ

もつと

ぬちゅ

あああ

はらうらう

いいい

ぬちゅ

ドブ

は

びくびくと痙攣して、ぴんと足先を張りつめさせたまま、  
また絶頂に達してしまう。

ピクンッ

ぬちゅ

はあ



どうだ？

ズブツ

ズン  
ズン

ピクンツ

もつと

ぬちゅ

はらうらうらう

あああ

ぬちゅ

ドブツ

いいい

は

【小鳥遊レイ】

(やら、も、う……むり、だめ、こわい……)

はあ

ぬちゅ

ピクンツ



